

内藤湖南の日本論・中国論

藤田昌志

有关内藤湖南的日本論・中国論

《提綱》

政教社は創刊《日本人》時組成的一个同人組織，这是志賀重昂，井上圓了、三宅雪嶺等人作为发起人连名创建的組織。政教社的起因是对 1884 年到 1887 年盛行的欧化主义—就是鹿鸣馆时代—的傾向的抗拒。在这篇論文中，我提出政教社的人们，特别是内藤湖南，想考察他的日本論・中国論。他对中国有着怎样的想法，展开怎样的論述，这个考察有着深远的意义。我想通过这一考察更好地理解近代日本的日本論・中国論。

一、内藤湖南について

内藤湖南は 1866（慶応 2）年 8 月 17 日秋田県（南部藩）^{かずの}鹿角に儒者内藤調一（十湾）の次男として生まれている。⁽⁷¹⁾ 1870（明治 3）年母、容子死去。習字を始め、『二十四孝』を読まされ、四書の素読を父に教わる。1881（明治 14）年明治天皇巡幸奉迎文（漢文）を作る。1885（明治 18）年秋田師範学校高等師範科を卒業。北秋田郡綴子小学校訓導となり、首席訓導にて校長の職務を兼ねる。1887（明治 20）年家に無断で上京し『明教新誌』（大内青巒主宰の仏教誌）の記者となる。1890（明治 23）年志賀重昂の推薦で『三河新聞』の主筆となる。1891（明治 24）年『日本人』を改名した『亜細亜』を編集し、三宅雪嶺、志賀重昂の論説の代筆をする。1893（明治 26）年政教社を退き、大阪朝日新聞の客員（実は主筆）となった高橋健三の私設秘書となり、論説執筆を助ける。1894（明治 27）年大阪朝日新聞記者となる。日清戦争起こる。1897（昭和 30）年『近世文学史論』『諸葛武侯』を刊行。4 月『台湾日報』の主筆となり任に赴く（～1898 月 4 月）。1899（明治 32）年小石川江戸川町の家が火災に遭い、蔵書を焼く。1902（明治 35）年 10 月大阪朝日新聞社より派遣され、満州の形勢を視察するほか、北清及び江浙各地を巡遊。1903（明治 36）年 1 月帰国。対露主戦論を主張。1907（明治 40）年京都大学文科大学史学科開設。9 月開講。10 月文科大学講師を囑託され、東洋史講座を担当する。1909（明治 42）年京都大学文科大学第一講座を担当する。1914（大正 3）年 3 月『支那論』刊行。1921（大正 10）年「応仁の乱に就て」を講演。1924（大正 13）年『日本文化史研究』『新支那論』刊行。1925（大正 14）年 4 月「大阪の町人学者富永仲基」を講演。1926（大正 15）年 8 月京大教授を停年退

官。1927 (昭和2) 年8月京都府相楽郡^{みかのほら}瓶原村の恭仁山荘に隠棲する。1929 (昭和4) 年11月マスペロ夫妻、恭仁山荘を訪う。1933 (昭和8) 年10月日満文化協会設立のため満州国へ赴く。1934 (昭和9) 年2月胃癌と診断される。4月^{ていこうしよ}鄭孝胥、恭仁山荘を訪う。5月吐血。病状悪化。6月26日死去 (享年69才)。

内藤湖南と政教社の関わりで^{つと}夙に有名なのは三宅雪嶺の『真善美日本人』『偽悪醜日本人』の代筆を長沢説と共にしたことである。内藤湖南と三宅雪嶺の関係については内藤湖南の日本論、中国論を考察する上で注意しなければならないところがある。『我観小景』で三宅は東洋学の研究は西洋人よりも漢文をこなす日本人の独壇場であることを強調している⁽⁷²⁾ がそれは『真善美日本人』でも既引用のように述べられており、湖南は「後日まさにその道を選んでいる」⁽⁷³⁾ のである。『真善美日本人』では又、三宅はアジア大陸に学術探征隊を派遣することを提言しているが、「雪嶺の談によると重昂が崑崙山探検を思い立ち、湖南を誘ったことがあるという。そのときに湖南は自分だけでいくことを暗示したといい、雪嶺はその大胆さに呆れている。湖南の海外雄飛熱は相当のものであったらしい。」⁽⁷⁴⁾ との言辞もある。湖南は1905 (明治38) 年に第2回目の満州旅行に出かけ、それは奉天 (瀋陽) の「四庫全書」を調査し、清朝の宮殿にあったその他の図書、寺院にあった満州文と蒙古文の『大蔵経』を調べることが目的とした⁽⁷⁵⁾ が、そこにそういった三宅雪嶺の影響を見い出すのも可能であろう。又、湖南が哲学から歴史に転向したのも「雪嶺の著書を読み、その人に接して、改めて自己の資質を自覚し、すすむべき方向を確かめたのではなからうか」⁽⁷⁶⁾ との推測が成り立つ余地はあると考えられる。

雪嶺は「自国のために力を尽くす」ことは「世界のために力を尽くす」ことであるという考えを持つ、一種の調和論者であり、世界を序列で見ず、国家を究極の目的とせず、東洋学のリニューアルを目論んでいた湖南も「日本の天職」は西洋のものを中国に伝えたり、中国の旧物を西洋に伝えることではなく「我が日本の文明、日本の趣味、之を天下に風靡し、之を坤輿に光被するに」あり、「我れ東洋に国するを以て、東洋諸国、支那最大と為すを以て、之を為すこと必ず支那を主とせざるべからざる也」⁽⁷⁷⁾ という中国尊重の上で日本の独自性を発揮していくという考えを持つ人間であった。両者には欧米追隨の道とは異なる道を歩もうとする共通点が存在したと言える。

二、内藤湖南の日本論

内藤湖南の日本論は『日本文化史研究』(1924 (大正13) 年) という形で結実している。次に『日本文化史研究』を中心として湖南の日本論を考察していくことにする。

「日本文化とは何ぞや (其一)」(1921 (大正10) 年) では日本民族が思想的自覚を生じ

たのは「蒙古襲来」の時であるとするが「忠孝」という語については本来、日本にその内容のものがあつたなら、その内容に応じた「名目」(形、言葉)があつたはずではないか⁽⁷⁸⁾とし、日本由来のものかどうかには注意深い態度を採っている。

続く「日本文化とは何ぞや(其二)」(1922(大正11)年)1月5日～7日)では中国文化は日本文化が形成される際にとふの「にがり」のような役割を果たしてとしている。⁽⁷⁹⁾又、文化中心移動説を述べ、「文化」には「中心から末端に向って行く運動」と「末端から中心に向って反動する運動」があるが、後者には「権力関係から来るところの運動」と「純粹の文化から来る運動」があり、当時中国人留學生が日本に多数やって来て、中国に「日本人の手を通した」西洋思想を伝えるのは末端から中心へと向かうの文化的反動であるとしている。⁽⁸⁰⁾

湖南は日本文化と中国文化の関係について、中国文化を日本文化にとっての「にがり」のようなものをみなしたが、再度、次のように明確に両者の関係を述べている。「日本文化といふものは、詰り東洋文化、支那文化の、今日の言葉で云へば延長である、支那の古代文化からズッと繼續して居るのである。それだから日本文化の起原とその根本を知る為にはどうしても先づ支那文化を知らなければならぬ。今、歴史といふものを日本の歴史だけで打切ってしまうと、その以前の支那の事を知らぬといふと、日本文化の由来を全く知らぬことになる。」⁽⁸¹⁾

「聖徳太子」(1924(大正13)年6月)では「文物典章を作った人」を「聖人」と言うが、聖徳太子はその名に恥じぬ「文明の建設者」であるとする。太子の事業の主なることの第一として湖南は「外交に関する事」を挙げる。「支那若しくは朝鮮の帰化人」による「通訳外交」を一新し、中国との対等外交を目指したことを高く評価している。ただ、それは「上表」を持って行かず「勅書」も受け取って帰らず、それでもって「国交を維持して、其の使者の座席などは恒に外国の主位を占めた」⁽⁸²⁾らしいというもので、「太子ぐるゝ巧妙に」外交を行った人はいなかったと湖南は述べる。太子の事業の第二として「内政」に関する事を挙げるが、それは「天皇の大一統主義」と言つてよい憲法十七条の發布のことを指している。湖南は又、「太子は仏教を盛にすると共に神祇をも崇敬せしめたに相違ない」⁽⁸³⁾と述べ、「飛鳥朝の支那文化輸入に就きて」(1929(昭和4)年)では太子の「日本文化と外国文化を両存する方針」が「古代日本人の精神」であつたと総括している。

「応仁の乱に就て」(1921(大正10)年)では歴史を「下級人民がだんだん向上発展して行く記録」ととらえ、「大体今日の日本を知る為には日本の歴史を研究するには古代の歴史を研究する必要は殆どありませぬ、応仁の乱以後の歴史を知つて居たらそれで沢山です」⁽⁸⁴⁾と有名な今日の日本、応仁の乱以後説を述べている。湖南は応仁の乱の前後は「一般に今

迄貴族階級の占有であったものが、一般に民衆に拡がるといふ傾きを持」⁽⁸⁵⁾ってきたとし、その傾向として具体的には、「伊勢の大神宮の維持法」(=伊勢講を始め、一般人から維持費を得るようになったことを指す)「(仮名)暦(=伊勢の町人が土御門家から暦の写本をもらい、仮名暦にし、領布し、暦が一般化、平民化したことを指す)「古今集などの伝授」(=公卿が生活維持のために始めたことを指す)「漢学における「新注の学問」(=朝廷の学問で用いていた漢唐以来の古注に変わって宋以後の朱子の新注の学問が一般に広まっていったことを指す)を挙げている。

「日本国民の文化的素質」(1929(昭和4)年)では、世界で文化を持ち得る国民はどのような条件を備えているかという問いを発し、中国では劉向、劉歆父子が目録学者として有名であり、書籍を六芸、諸子、詩賦、兵書、数術、方技に分類し批評しているが、それがあるがゆえに中国人は文化を持っている国民と言える、インド人やギリシヤ人も同様の学問分類を有し、文化を持つ国民と言えるが日本人は外国とりわけ中国の文化の影響を受けてきたからそうした意味での文化はない、しかし暗黒時代となった応仁、文明以後に皇室が衰微した際に「日本人が暗黒時代でも離さなかった並びに生み出した所の文化」があり、それが日本国民が文化を有し得る国民と言える証拠になると湖南は言う。その離さなかった文化とは何かと言うと帝室の「歌道の伝授」、「神道の伝授」、そしてこの時代に最も喜ばれた「源氏物語」である⁽⁸⁶⁾と述べている。以上のものは「寧ろ日本が支那文化の衣を脱いで、自分が丸裸になってから得た所のもの」であり「日本人は正直を尊び、ありのままなる姿を尊ぶことを特色とするやうになった」⁽⁸⁷⁾とする。

湖南には中国の宋代を近代と見る視点があり、それは「汎ゆるものに平民精神が入ってきたことを「中国近代の一番大事な内容」⁽⁸⁸⁾とするが、では日本の同様な時代はいつかということ考えたときに思い到ったのが応仁の乱の時代であったと考えられる。

三、内藤湖南の中国論

湖南は「東洋文化」が「古来支那中心であった」ことを認めている。そして、その上で日本の独自性を究明したのであるが、本家本元の中国についてはどのような認識を持っていたのであろうか。

一体、湖南には言葉による「解析」の限界を知り、エトス、時代状況の典型を把握できるような人物、エピソードを重視するところがある。「何ものの見たてにも似ず三日の月」と詠むのは「解析」を嫌う気質を象徴的に表しているし(既述)、「応仁の乱に就て」で山名宗全等の言辞を紹介したことや高木智見氏が述べるように⁽⁸⁹⁾蔡文姫について湖南が取りあげた説話に時代の典型的人物、エピソードを重視した湖南の傾向が見て取れる。

又、湖南の歴史認識・ものの見方の特徴として「変化の視点から歴史を見ている」⁽⁹⁰⁾ ことが挙げられるが文化中心移動説にもその特徴は表れていると言えよう。もっとも『新支那論』(1924(大正13)年)の「六、支那の文化問題 新人の改革論の無価値」で次のように述べている如く、文化の中心移動は土地、地方に止まらず「階級」においても行われる。

前に支那の文化中心が、時代によってだんだん移動を来たしたといたが、此の移動は単に地方において行はれるのみならず、階級においても行はれて居る。／六朝から唐頃まで、名族があらゆる文化を占有して居った時代から以来、だんだん変化して来て唐末五代の間に、古来の名族が大概滅亡すると共に、文化の中心が読書人階級に移ったのである。勿論此の読書人階級の大部分は仕官者(筆者注:役人)であるが、元朝において仕官者の大部分を蒙古色目人などに占有される様になってから、文化の中心が処子(筆者注:役人にならないで民間にいる人物)に移った時代があるので、元末から明の中頃迄は文学芸術は多く処子の間にあったといわれて居る。

更に続けて清朝では商人階級の台頭を指摘している。

変化の視点から歴史を見ていた湖南は『支那論』(1914(大正3)年)「一、君主制か共和制か」で「世界の大勢」について次のように述べている。

一体世界の大勢の変遷は、或る時には幾らか旧に復るやうな形があっても、実は皆新しく形られた勢力の中心に向って、新しい局面を開いて行くものであるから、君主独裁政治の弊が極まって、又貴族政治に復るといふよりか、他の政治に変わるといふことが、大勢の自然であると見るが至当である。其処へ持って来て支那は近来外国に接触し、外国に留学生をも出したが為に、新しい時代の進歩した政論を聞くことになって、遂に共和政治といふやうな政体を知り始めた。そこで黄宗羲などの考へた貴族政治に復るべき大勢が、今度は一転して共和政治に向って来たのである。⁽⁹¹⁾

ここには世界の政治の大勢が「貴族政治→君主独裁政治→共和政治」という普遍的流れに沿って動いていることが述べられている。⁽⁹²⁾ それは中国にも該当する大勢であった。もっとも中国の場合、「近代支那の文化生活」で述べているように「平民発展時代が即ち君主専制時代である」という特殊性を持っており、それは西洋との大きな相違である。また、この「近代支那の文化生活」で湖南は中国近代を宋の時代に始まるとし、その内容として

「平民発展の時代」と「政治の重要性減衰」を挙げている(既述)が、今から考えると湖南独特の中国近代観であると言える。なぜなら中華人民共和国成立以後の中国大陸の歴史観では中国近代の始まりをアヘン戦争とするのが通説であるからである。

「応仁の乱に就て」で述べられていたように湖南には歴史は「下級人民がだんだん向上発展して行く記録」であるとする認識が存在した(既述)。中国についてもそれは例外ではなく、湖南が中国が共和政治へ向かうであろうと予測したのはその認識に基づくものであった。

それでは中国に共和政治を導く具体的契機は何かと言うと、黄宗羲や曾国藩に見られる「平等主義」であると言う。⁽⁹³⁾とりわけ曾国藩に対する湖南の評価は高く、太平天国の乱の平定に功績のあった曾国藩について「曾国藩は、軍中に居って幕友等と同等の生活」をしていて、「之が軍隊の間に平等主義が力のあった証拠」になると言う。又、「其の時曾国藩と並んで有名な人は、湖北巡撫胡林翼と云ふ人で、此は度量の点に於ては、或は曾国藩よりも一層えらい人であったが、殆ど自分を捨てて人を尊敬し、人に功を帰し、己に過ちを引受けて、曾国藩と相助け合って長髪賊平定の大業を遂げた。長髪賊平定の大業は一面から言へば、官憲の力によらぬ民主思想、平等主義の発展と云って宜しい。支那人の此の如き思想が、立憲政治の一大要素になることと思ふ。」⁽⁹⁴⁾と述べ曾国藩等の「平等主義」を高く評価している。

湖南の「平等主義」「平民主義」は「皇帝に対する官僚、官僚に対する士大夫を含む在野の人々のあり方について述べられたものであり、主として、官の権力、官軍の軍事力に依拠しない自立的志向、さらには、そこに内在する対等的な人間関係を表すものと理解されよう」⁽⁹⁵⁾との指摘があるが重要な指摘である。「応仁の乱に就て」で述べられたように湖南には日本においても時代は「平民」(=民衆)中心の時代へ移行していくという認識があったが、応仁の乱の時代は「同時に日本の帝室と言ふやうな日本を統一すべき原動力から言っても、大変価値のある時代であったといふ事は之を明言して妨げなからうと思えます」と述べているように、皇室の尊重という点では当時の普通の日本人の一般的な感覚と何ら変わるところはなかった。しかし、中国については、より「平民」中心の平等主義を模索しているのである。

湖南が更にもう一つ共和政治を導く具体的契機として注目していたものとして「地方自治」がある。

中国では「隋唐以来人民の自治は存在して居るが、官吏は自治の範囲に立入らずに、唯文書の上で執り行ふ所の職務だけを行って居る。」「民政の最も行届いた」漢の時には県の下に「郷官」又は「郷亭の職」という「其の土地の名望で任命される官吏」があって地方

行政をやっていたが、隋の文帝が郷官を廃してからは、「官吏といふ官吏」は「皆渡りものになって」しまい、「渡りものの官吏の常」として、任期の間だけ、租税を滞りなく納め、盗賊などが出ないようにすればよいという考えで、「地方の人民の利害休戚といふやうなもの」は念頭に置かなかった。そうして官吏は徴税権を利用して「人民から手数料を徴収」し、「一期三年位の間に於て、一族が一生食へるだけの財産を蓄へるといふことを目的」とするようになってしまった。「地方の人民」は「全く官の保護を受けるといふ考え」が「無くなって」しまい、「地方の人民に取って総ての民政上必要なこと、例へば救貧事業とか、育嬰の事とか、学校の事とか、総ての事を皆自治団体の力でするといふことになって来た。」⁽⁹⁶⁾ 「それゆゑ此の昔から存在して来た所の自治団体を根底にして、旧来の習慣を斟酌し、其の上に新しい自治制を築き上げれば、自治制も立派に成功」⁽⁹⁷⁾ すると湖南は言う。

湖南の中国共和制論は 1910 年代から 1920 年代にかけておこった「米国の軸とする欧米列国の外交・経済活動の新たな展開」を湖南自身「危機的に」受けとめる中で、「共和制完成のための主たる方法論を、列国の中華民国政府に対する非「利己的」な関与（「監視」）とその下での中国人民による地域社会を場とする自立的改革から、日本の「小資本の商人の経済的活動」が促す中国の地域社会の改革（「自発的革新」）へと移行させていった」。⁽⁹⁸⁾

日本の「小資本の商人の経済的活動」は米国の企業家、日本の大資本の利潤追求の論理とも大いに異なるもので、それこそが中国の地域社会を改革していくと湖南は考えていた。

湖南は米国の企業家や日本の大資本家といった「利潤追求のために世界規模で恣に経済活動を図る主体」⁽⁹⁹⁾ を否定し、「生命をも財産をも惜まうとせないうで、兎も角先へ先へと支那の経済機関を変化すべく、深入りをして居る」小資本の商人の経済的活動は、「これは支那人も日本人もまだ自覚して居らぬ一種の使命に支配されて居る新しい東洋文化を形造る為に、知らず識らず努力してゐるもの」⁽¹⁰⁰⁾ と考えた。一体、湖南には利潤追求至上主義の米国の企業家や日本の大資本家を嫌うところが存在するが、それは儒教的倫理感に基づくものなのかもしれない。儒教について湖南は次のように言う。

儒教が支那を今日の積衰積弱に陥らしめたといふ議論は或る点迄は真実であらう。然しそれらの弊害があるにもかかわらず、儒教によって長い間支那の道徳が維持されたといふ事には、其の原因がなければならぬ。初めから儒教が支那の社会組織に内面的若しくは対外的に、何等の効能がないものなれば、今日迄永続して居る道理がない。儒教が今日迄維持されたといふ其の原因が今日にも存在して居るや否や、其の原因は支那の社会の成り立ちから除り去り得るものなるや否やといふことを、歴史的に玩味しなくては、儒教排斥論は甚だ無価値なものといはねばならぬ。⁽¹⁰¹⁾

中国の「郷団」自治の中心には儒教的家族主義があると湖南は考えていたようであり、儒教に対して少なくとも全面否定していなかったことはこの引用部分からも推察されるのである。

中国の将来について湖南は「農民」が中心になり、総合的文化生活が「将来の文化主体」となると述べ、それは「例へば『紅樓夢』といふ小説にあらはれた貴族生活の如きものであらうかと思はれる」⁽¹⁰²⁾と言う。ここに文化史家と呼ばれることを好んだ湖南の心的傾向を見て取ることができる。

湖南には中国に対する敬意が存在した。日清戦争以降、日本人には劇的な変化が生じた。つまり、「戦争を歌った詩の多くは、士族階級の伝統に基づき漢詩で書かれたが、漢詩文は戦争たちまち日本人の教養の中心から^{すべ}迂り、日本語の古風な変型にすぎない地位にまで^{おとし}貶められた。日清戦争後に教育を受けた日本人は、一般に、それ以前の教養人のような自然さでは漢詩文が書けなくなり、四書五経に基づく語彙は、学者の書くものからさえ、徐々にその姿を消していった」⁽¹⁰³⁾のであった。日清戦争を境として日本人は中国文明の優越性を疑い、否定さえし始めたのである。そうした時代状況の中で、湖南は中国文明の偉大さを謳う。将来、農民が中国の中心となるであろうと述べるところでも「唯其の農民が文化階級となった時に、その文化の主体が何物であるかは、世界の国民生活に支那より先へ進んだものがなくて、我々に暗示を与へる所のものがないから、之を想像するに苦しむのである。」⁽¹⁰⁴⁾ (傍点筆者)と中国の優越性を明言しているし、「近代支那の文化生活」では「結局は支那人といふものは自分の優越性を大変認めて居る国民でありますから、ロシアの真似をして見たり、その前は日本の国会政治を学ぼうとしたりしましたが、結局支那人は自己の優越性を認めて、やはり従来の支那式にする方が宜いといふことになりはしないかと思ふ。」⁽¹⁰⁵⁾と末尾で述べ中国の独自性、自尊心の強さを尊重している。

思うに内藤湖南の日本論はその中国論と不即不離の関係にあり、それを裏付ける「彼が宋代を近世として評価し、隋唐を貴族の時代とする中国史の見方はある意味で、貴族の時代(平安)の克服を近世(江戸)とし、近世の庶民文化が近代(明治維新)へと向かっていったとする日本史の理解の投影とも言えるのではなからうか。」⁽¹⁰⁶⁾という識者の言もある。

1860年代に生まれた明治青年の第二世代としての湖南は開かれた国粹主義者、また普遍主義者として中国論を展開した。湖南の独創性は中国と日本の両方を見すえながら、それぞれの独自性を究明していった点にある。湖南の中国論には中国に対する感情的な差別の色合いが感じられない。それは湖南が時代の雰囲気とは一線を画する、真の自由人であったことによるのではないか。湖南の中国論には現在でも傾聴すべき点が多々あると考える。

四、結語

思うに日本人、とりわけ、明治以降の日本人は欧米列強の外圧に対してどのように対処するかについて苦慮してきた感がある。それは大方の認めるところであろう。湖南も関係した政教社の特質は外圧、欧化に対する反発とともに、その外圧、欧化を契機として新たな日本論、「日本的」なるものを創出しようとした点にある。もちろん、それは世界の中で一定の地位を占めることによって新たな支配者となる契機となった場合もあったであろうが、内藤湖南のように新しい中国論、そしてそれと不即不離の日本論（逆も又真）を創出した人もいた。こうした人のいたことを日本にいる我々（日本人だけでなく日本にいる人々）は誇りにしてもいいのではないかと思う。

【注】

- (71) 内藤湖南の伝記は主として (S.51) 『内藤湖南全集』筑摩書房第 14 巻の年譜に依った。
- (72) 三田村 (S.47) p.138
- (73) 三田村 (S.47) p.138
- (74) 三田村 (S.47) p.133
- (75) 小川環樹責任編集 (1995) p.20
- (76) 三田村 (S.47) p.147
- (77) 『全集』第 2 巻 p.135
- (78) 『全集』第 9 巻 p.11
- (79) 『全集』第 9 巻 p.18
- (80) 『全集』第 9 巻 p.20
- (81) 『全集』第 9 巻 p.21
- (82) 『全集』第 9 巻 p.56
- (83) 『全集』第 9 巻 p.59
- (84) 『全集』第 9 巻 p.132
- (85) 『全集』第 9 巻 p.147
- (86) 『全集』第 9 巻 pp.23-236
- (87) 『全集』第 9 巻 p.237
- (88) 『全集』第 9 巻 [近代支那の文化生活] p.126
- (89) 高木智見 (2001) p.41
- (90) 高木智見 (2001) p.42
- (91) 『全集』第五巻『支那論』一、君主制か共和制か p.328
- (92) 吉尾寛 (2001) p.196 参照。
- (93) 吉尾寛 (2001) p.198 参照。
- (94) 『全集』第五巻『支那論・附録』 p.425
- (95) 吉尾寛 (2001) p.199

- (96) 『全集』第五卷『支那論』三、内治問題の一 地方制度 p.367
- (97) 『全集』第五卷『支那論』五、内治問題の三 政治上の徳義及び国是 p.396
- (98) 吉尾寛 (2001) pp.210-211
- (99) 吉尾寛 (2001) p.212
- (100) 『全集』第五卷『新支那論』三、支那の革新と日本 東洋文化中心の移動 p.511
- (101) 『全集』第五卷『新支那論』六、支那の文化問題 新人の改革論の価値 p.540
- (102) 『全集』第五卷『新支那論』六、支那の文化問題 新人の改革論の無価値 p.538
- (103) ドナルド・キーン著 徳岡孝夫訳 (1995) p.19
- (104) 同 (101)
- (105) 『全集』第八卷「近代支那の文化生活」 p.139
- (106) 葎森健介 (2001) pp.272-273

《参考文献・引用文献》

- (1) 色川大吉 (S.51) 『明治精神史 (下)』講談社学術文庫
- (2) 川崎庸之等総監修 (1998) 『読める年表・日本史』自由国民社
- (3) 佐藤能丸 (1998) 『明治ナショナリズムの研究 — 政教社の成立とその周辺 —』芙蓉書房出版
- (4) 三宅雪嶺 (1924) 第一次『我観』「自分の政治関係」11月号
- (5) 三宅雪嶺 (1933) 『明治思想小史』岩波書店
- (6) 三宅雪嶺 (1895) 「面棚偶語 (二)」第三次『日本人』第5号 (1895)
- (7) 中野目徹 (1993) 『政教社の研究』思文閣出版 p.28
- (8) 松本三之介 (S.55) 「解題」(著者代表志賀重昂 発行者布川角左衛門 (S.55) 『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房所収)
- (9) 著者代表志賀重昂 発行者布川角左衛門 (S.55) 『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房
- (10) 志賀重昂 (1888) 「日本前途の国是は「国粹保存主義」に撰定せざるべからず」(『日本人』第3号 (1888年5月3日))
- (11) 志賀重昂 (1888) 「日本国裡の理想的事大党」(『日本人』第5号 (1888年6月3日))
- (12) 志賀重昂著(近藤信行校訂) (2001) 『日本風景論』岩波文庫 岩波書店
- (13) 大室幹雄 (2003) 『志賀重昂『日本風景論』精読』岩波現代文庫 岩波書店
- (14) 志賀重昂 (1921) 「日本人口の処分案」(『日本一』1921年2月号所載 (1928) 『志賀重昂全集』第1巻所収)
- (15) 鹿野政直 (S.46) 「ナショナリストたちの肖像」(責任編集鹿野政直 (S.46) 『日本の名著 37 陸羯南 三宅雪嶺』中央公論社所収)
- (16) 鹿野政直責任編集 (S.46) 『日本の名著 37 陸羯南 三宅雪嶺』中央公論社
- (17) 本山幸彦 (S.49) 「調和的人生論とその根柢 — 三宅雪嶺を中心に —」(福沢諭吉等著 (S.49) 『現代日本文学大系』筑摩書房所収)
- (18) 福沢諭吉等著 (S.49) 『現代日本文学大系』筑摩書房
- (19) 『内藤湖南全集』筑摩書房 (= 『全集』)
- (20) 三田村泰助 (S.47) 『内藤湖南』中公新書 中央公論社

- (21) 小川環樹 (1995) 「内藤湖南の学問とその生涯」(小川環樹責任編集 (1995) 『内藤湖南』(中公バックス日本の名著 41) 中央公論社所収)
- (22) 小川環樹責任編集 (1995) 『内藤湖南』中公バックス 日本の名著 41 中央公論社
- (23) 吉尾寛 (2001) 「内藤湖南の中国共和制論 — 『支那論』 から 『新支那論』 への道すじを考えつつ —」(内藤湖南研究会編著 (2001) 『内藤湖南の世界 — アジア再生の思想』河合文化研究所所収)
- (24) 内藤湖南研究会編著 (2001) 『内藤湖南の世界 — アジア再生の思想』河合文化研究所
- (25) 子安宣邦 (2003) 『日本近代思想批判 一国知の成立』岩波現代文庫 岩波書店
- (26) 貝塚茂樹 (1975) 「内藤湖南《開化した国民主義者》」(朝日ジャーナル編集部編 (1975) 所収)
- (27) 朝日ジャーナル編集部編 (1975) 『新版 日本の思想家 中』朝日選書 45 朝日新聞社
- (28) 高木智見 (2001) 「内藤湖南の歴史認識とその背景」(内藤湖南研究会 (2001) 所収)
- (29) 吉尾寛 (2001) 「内藤湖南の中国共和制論 — 『支那論』 から 『新支那論』 への道すじを考えつつ」(内藤湖南研究会 (2001) 所収)
- (30) ドナルド・キーン著 徳岡孝夫訳 (1995) 『日本文学の歴史』Ⅳ近代・現代篇 1 中央公論社
- (31) 葭森健介 (2001) 「内藤湖南と京都文化史学」(内藤湖南研究会 (2001) 所収)
- (32) 谷川道雄 (2001) 「戦後の内藤湖南批判について — 増淵龍夫の場合」(内藤湖南研究会 (2001) 所収)
- (33) 内藤湖南研究会 (2001) 『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』河合文化教育研究所
- (34) 子安宣邦 (2003) 「近代知と中国認識 — 「支那学」の成立をめぐる —」(子安宣邦 (2003) 『日本近代思想批判』所収)
- (35) 子安宣邦 (2003) 『日本近代思想批判』(岩波現代文庫) 岩波書店

(順不同)

〔付記〕『全集』等からの引用は旧かなづかいはそのままとしたが、読者の便に供するため、旧字は新字に変更したことを付言しておく。なお、本稿は拙稿「志賀重昂・三宅雪嶺の日本論・中国論」の後を継ぐものである。